

エーゲ海の風

星座神話の向こうに広がる古代ギリシアの天文学

発祥時から意味づけや姿が変化した多くの星座の中には、メソポタミアからギリシアに渡った後に変化したものもあります。例えば「ヘルクレス座」は古代ギリシア後期に別の星座から変遷し、「てんびん座」も古くは「さそり座」の一部だったものが独立しました。

撮影／早水 勉・川口雅也

アテネ国立考古学博物館（National Archaeological Museum of Athens）には、ギリシャ各地から運ばれた膨大な出土品が展示されている。古代ギリシア時代の神話にまつわる品はもちろん、先史時代からローマ時代まで幅広い時代の遺物を見て回ることができる。写真はイオニア式の柱で飾られた博物館正面入り口。

第3回 姿を変えた星座たち〈後編〉 ギリシア伝来後の変化

水先案内人 早水 勉（日本公開天文台協会）

はやみず・つとむ

星食観測・研究をライフワークとして活動し、日本天文学会天文功労賞、国際表彰「ホームー・ダボール賞」を受賞。古代ギリシアを中心とする天文学史にも造詣が深い。

アラトスのファイノメナ

古代メソポタミアから古代ギリシアに伝わったであろう星座は、古代ギリシア詩人ホメロス（紀元前8世紀頃）やヘシオドス（紀元前8世紀頃）の著作にも部分的に記されています。ホメロスは叙事詩『イリアス』『オデュッセイア』の作者として、ヘシオドスは『神統記』『仕事と日々』の作者として知られます。

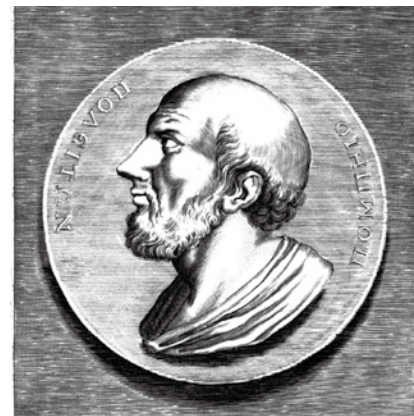
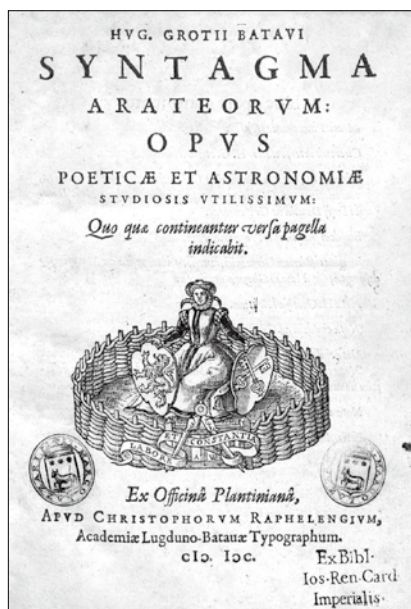
さらに時代を下った、古代ギリシアの天文学者エウドクソス（紀元前408年～355年頃?）は、当時の星座と気象に関する著作『ファイノメナ』を記しました。残念ながら、そのオリジナルの著作は失われましたが、詩人アラトス（紀元前315年～240年頃?）が『ファイノメナ』を詩に書き改めて、同名の『ファイノメナ』として残しています。小アジアのソロイ出身で、紀元前277年頃古代ギリシア北部のマケドニアの王に、文学サークルのメンバーとして招かれています。彼はホメロスを研究する古典学者でもありました。アラトスにはいくつかの教訓的な著作があったようですが、現存する作品は『ファイノメナ』のみです。

この『アラトスのファイノメナ』（以下単に『ファイノメナ』）は、現代に通じる星座に関して体系的にまとめたものとしては最古の重要な著作です。『ファイノメナ』には43星座が記されており、その多くの部分がそのままプトレマイオスまで引き継がれています（『ファイノメナ』の日本語訳は、京都大学学術出版会による『ギリシア教訓叙事詩集』の中で「星辰譜」として読むことができます）。

アラトスの世界観は、中世の哲学者フーゲー・グロティウス（オランダ：1583年～1645年）により『グロティウス星座図帳（Hug.Grotii Syntagma Arateorum）』として復元されています。この中に描かれている古典的な星座絵は、現在私たちがよく目にするヘベリウスやウラノグラフィアの星座絵とは趣きが随分と異なっていますが、それゆえにアラトスの時代から引き継がれている永い歴史を感じることができるでしょう。



▲ホメロス（左）とヘシオドス（右）の像。いずれも、紀元前2世紀頃古代ギリシア・ヘレニズム期に製作されたオリジナルが、ローマ期にコピーされたもの。（大英博物館所蔵）



▲コインに描かれたアラトスの肖像。

◀アラトスの著作『ファイノメナ』の世界観を後世まとめた「グロティウスの星座図帳」。

ファイノメナからプトレマイオスへ

『ファイノメナ』に記される星座たちは、その多くが現代の私たちにもなじみの深いものばかりです。そしてそれらの星座に関して簡潔に記された記述から、良く知られたギリシア神話もすでに伝えられていたこと、つまりこの時期には現代星座の骨格がほぼ出来上がっていたことがわかります。しかし、その中には古代ギリシア末期のプトレマイオスの星座とは異なっているものがあります。そんな星座たちを紹介していきましょう。

●おおぐま座、こぐま座

現代のおおぐま座の中核部分は北斗七星として広く知られています。「斗」はひ

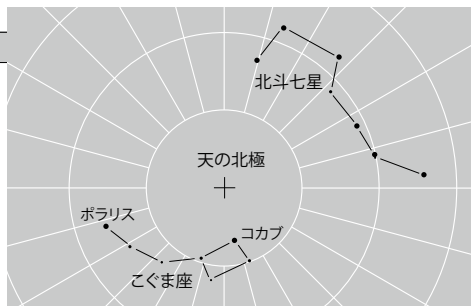
しゃくの意味で、西洋でもビッグディッパー（大きなひしゃく）といい、共通したイメージが定着しています。また、こぐま座対として「小びしゃく」「スモールディッパー」と呼ばれています。

古代メソポタミアでは、北斗七星を「荷車」と見ていました（古代中国でも、「ひしゃく」以外に「車」とみなす伝承があります）。古代メソポタミア・アッシリア時代の星表に、「3つの星は車輪の上に立ち、明るい星が前方に、2つの星は車輪に並んでいる」とあります。G. ホワイトの復元図には、ミザール（おおぐま座5星）の位置にキツネが描かれています。これは古代メソポタミアの粘土文書に「その星（キツネ）は、荷車のシャフトに位置する」と刻まれていることを根拠としています。G. ホ

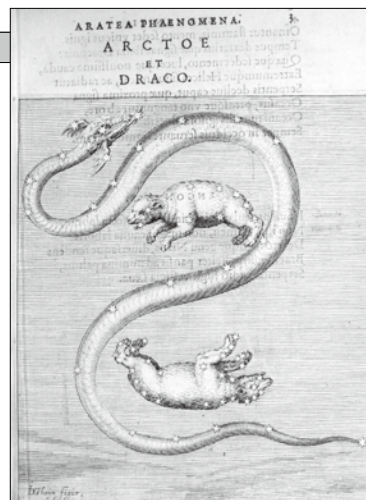


おおぐま座、こぐま座

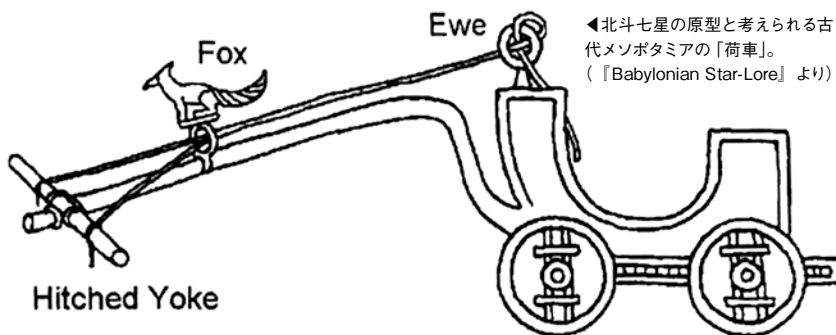
▼古代メソポタミアの「高位の人が乗るソリ」の図柄。
(『Babylonian Star-Lore』より)



▲ホメロスの時代(紀元前8世紀)の天の北極はおおぐま座(北斗七星)とこぐま座の間にあった。



▶アラトスの世界観が復元されたグロティウスの「おおぐま座、こぐま座、りゅう座」。歳差により、この時代の天の北極はりゅう座の尾の位置にあった。(Linda Hall Library Digital Collections より)



◀北斗七星の原型と考えられる古代メソポタミアの「荷車」。
(『Babylonian Star-Lore』より)



▲冥界の神をおびやかすほどの治療の腕前をもったアスクレピオス。足元の蛇の巻き付いた杖は、医療の象徴としてWHO(世界保健機関)のシンボルマークにもなっている。(アテネ国立考古博物館所蔵)

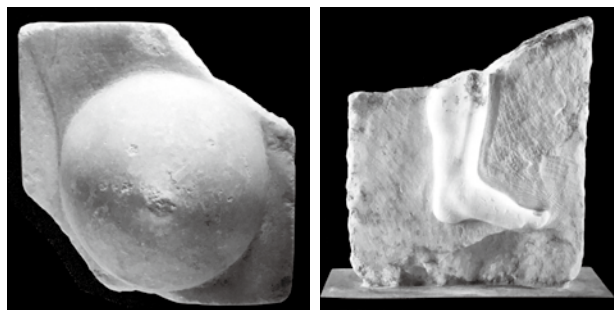


へびつかい座、へび座

◀グロティウスにより復元されたアラトスの「蛇使い」。
(Linda Hall Library Digital Collections より)



▲古代メソポタミアの座る蛇の神(ニラー神)。へびつかい座の原型と考えられる。
(『Babylonian Star-Lore』より)



◀アスクレピオスはギリシア神話上の最高の医師。アスクレピオスの神域からは様々な身体部位の大理石の奉納浮彫りが出土している。写真は、患部の治療を祈り奉納された乳房の浮彫りと、足の浮彫り。(アテネ国立考古博物館所蔵)



ワイトはこれを、ミザールに近接するアルコルと解釈したと考えられます。また、北斗七星は、古代メソポタミアにおける、「高位の人が乗るソリ」ともされていました。

古代ギリシアになると、荷車の他、大熊、小熊の呼び方が一般的となってきます。ホメロスの『イリアス』『オデュッセイア』には、北斗七星を「ハマクサ（車）」「アルクトス（熊）」と記されています。他にも、こぐま座は「キュノスーラ（犬の尾）」、おおぐま座（北斗七星）は「ヘリケー（回旋）」とし、『アラトスのファイノメナ』にも「別名をキュノスーラと呼び、もうひとつをヘリケーと呼んでいる」の記述があります。「回旋」とは、日周運動で天の北極を中心に回転することを意味しています。この時代には、天の北極はおおぐま座（北斗七星）とこぐま座の間にあり、ともに天の北極を日周運動により周回していました。

●へびつかい座、へび座

筆者が子供の頃には、他の星座とは様相が異なるこの星座を特に奇異に感じたも

のでした。現代に伝わるへびつかい座は、医術の神アポロンの息子アスクレピオスとされています。蛇は、脱皮を繰り返し皮膚が再生されることから、健康のシンボルとされていました。

G. ホワイトは、この星座の原型をやはり古代メソポタミアにあると指摘しています。バビロニア人たちはこの星域に蛇の姿をした「ニラー」という守護神を描いています。ニラーは、蛇の姿をしたエクルの神々のひとりで、下半身が蛇で座った姿勢で描かれます。

この座の蛇の神は、その後長く忘れかけられていたと考えられますが、古代ギリシア人はここに「蛇を運ぶ人物」を思い描いたと推測されます。『アラトスのファイノメナ』には「蛇使い」の記述に「両足で巨大な生き物、つまり蠍を踏みつけ、その眼と胸の上をすくくとまっすぐ立っている」と記されています。しかしながら、まだ「医療」「アスクレピオス」との結びつきはまったく記されていません。筆者の調べるところでは、アスクレピオスとする記述はヒュ

ギーヌス（紀元前64年頃～紀元17年）が初めてと考えられます。ただしゲタエ王カーナボン、ヘラクレス、テッサリア王トリオパス、ロードスのフォーボスら複数の候補と併記されています。

●みずがめ座

みずがめ座の付近には、（下半身が魚の）やぎ座、みなみのうお座、うお座、（海の怪物の）くじら座、エリダヌス座等の「水」に関連した星座が多数配置されています。これは、古代メソポタミア時代において、冬（冬至の頃）から春（春分の頃）にかけて太陽がこの付近に到達する頃は、降雨が増大し河川の氾濫する時期であったためと考えられています。古代メソポタミアでは、「偉大なるもの（グラ）」が描かれおり、グラの両手からは河川の氾濫を象徴する水が流れ出て、みなみのうお座の原型となる魚に達している図柄も存在しています。このグラは、知と水の神エンキ神に相当するものと思われます。

古代ギリシアに下ると、『ファイノメナ』にはこの一帯が「水」という星座として記されています。この「水」の記述の中に「灌水する人」が登場し、これが後世には「みずがめ座」になりました。アラトス以降のヒッパルコスやプトレマイオスは、すでに「みずがめ座」としています。

●てんびん座

黄道十二星座は、季節を知る必要から最も早期に考案されてきましたが、その中で最も新しいものが「てんびん座」です。古代メソポタミアの時代から、さそり座の前爪の一部分とされており、てんびん座の星々の中に、 α 星=ズベン・エル・グヌビ（南の爪）、 β 星=ズベン・エス・カマリ（北の爪）等のようにその名残があります。

古代ギリシアの時代に移り、『ファイノメナ』には「はさみ」と記され、「その（へびつかい座、へび座）くねる下方にある大きな“はさみ”を君はつかみ取りたまえ。しかし、これは明るい光に欠けるうらみがあって、全く精彩がない」と詠まれています。

みずがめ座



▲両手から水が流れ落ちる古代メソポタミアの「偉大なるもの（グラ）」の図像。知と水の神エンキ神を示していると考えられる。現代のみずがめ座の原型。（『Babylonian Star-Lore』より）



▲古代バビロニア期の円筒印章にある図柄。グラの下に入る魚は、みなみのうお座の原型と考えられる。（『Babylonian Star-Lore』より）

気候変動と文明の発祥

メソポタミアは現在のイラク、シリアに当たる地域です。この地域は現在でこそ砂漠気候で農耕には不向きです。しかし古い花粉の分析から、紀元前6000年頃は高温で湿潤な気候（ヒブシサーマル期）だったことがわかっています。メソポタミアもサハラ砂漠も緑で覆われていましたが、紀元前3000年頃からの気候変動により湿潤な気候は終わり、乾燥化が始まりました。このため、人々は水を求めて大河の流域に集まり農耕を行ったと推測されています。紀元前2000年頃には、ついに現在のような砂漠になったのです。チグリス河、ユーフラテス河の下流にメソポタミア文明が、ナイル川の下流にエジプト文明が、そしておそらくインダス文明と黄河文明が発祥したのは、この気候変動による影響が背景にあるとする学説があります。

砂漠の中において、もちろん水は最も重要な資源ですから、水や川などの自然に対する畏敬の念から「水の神」が創造され、大きな信仰を集めていたことは想像に難くありません。河川の氾濫は大きすぎると人々の生命さえ脅かしますが、小さすぎると土地がやせて作物の成長が妨げられてしまいます。当時の為政者たちは、国民を代表して「水の神」に請願できる選ばれた者でもあり、国民の尊敬を集めていました。



古代メソポタミアでも古くは「サソリの爪」とされていましたが、時代が下ると太陽の神サマスのシンボルの天秤が発生します。これは、古代メソポタミアにおいては、歳差の影響で秋分点がてんびん座の位置にあり、ここにある星が「昼夜を分ける」ことの象徴だったためと考えられています。

秋分には太陽が真東から昇り真西に沈むので、このことから「公正な裁き」の意味も持つようになりました。こうして太陽の神は、バビロニアの神殿において真実と公正の役割を象徴しました。また、天球上でちょうどプレアデス星団の反対側の位置であることを意図して、この天秤を置いたとも考えられています。ようやく、てんびん座がさそり座から独立したひとつの星座となるのは、紀元前1世紀頃のことです。

●ヘルクレス座

ヘルクレス座は、特にその成立過程に興味を惹かれます。『ファイノメナ』に記されているのは、ヘルクレス座ならぬ「膝を折る巨人（エンゴナシン）」です。そして、たいへん興味深いことに、アラトスは「この人物の名はわからない」と記しています。その部分を抜粋してみましょう。

「この頭（りゅう座の頭）の近くに、労苦を背負い込んだ男に似た像が巡回している。誰もしかとその正体を明かすことも、このような労苦がのしかかっている人物の名をあげることもできず、ただただこれを膝を折る人（エンゴナシン）と呼ぶ。つまり、これは煩勞に耐えて屈み込む人に似ているのだ。」

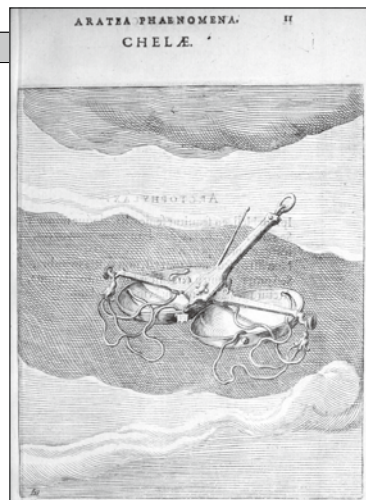
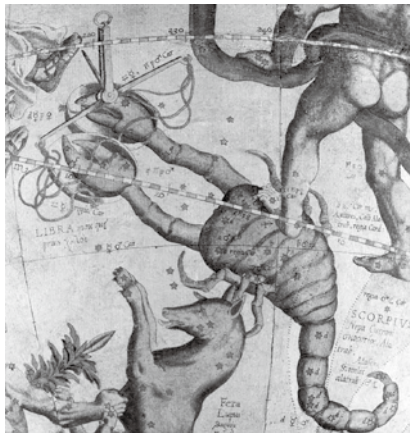
ヘルクレス座の α 星「ラス・アルゲティ」の名称は、アラビア語の「ひざまづくもの頭」の意味で、ここにもアラトス古来の名称が残されています。ここにあった星座は、古代ギリシアでは末期まで「エンゴナシン」と呼ばれ、「ヘルクレス」の名は、ヒュギーヌスにより初めて登場しています。

ヘルクレスと言えば、日本人でも知らぬ人はないギリシア神話ナンバーワンの英雄です。当初は古代ギリシア南部に定住した

てんびん座



▲ G. ホワイトの復元による古代メソポタミア紀元前1000年頃のさそり座。（『Babylonian Star-Lore』より）



▲ グロティウスにより復元されたアラトスの「はさみ（Chelae）」。図柄は明瞭に天秤が描かれているが、上部には「はさみ（CHELAE）」のキャプションがある。（Linda Hall Library Digital Collections より）

◀メルカトル天球儀（16世紀）のてんびん座まではさみを伸ばさずさそり座。

ヘルクレス座



▲レルネの沼に棲み9つの頭をもつ蛇の怪物ヒドラと戦うヘルクレス。足下には、ヒドラと一緒に倒されたカニの姿も見える。（アテネ国立考古博物館所蔵）

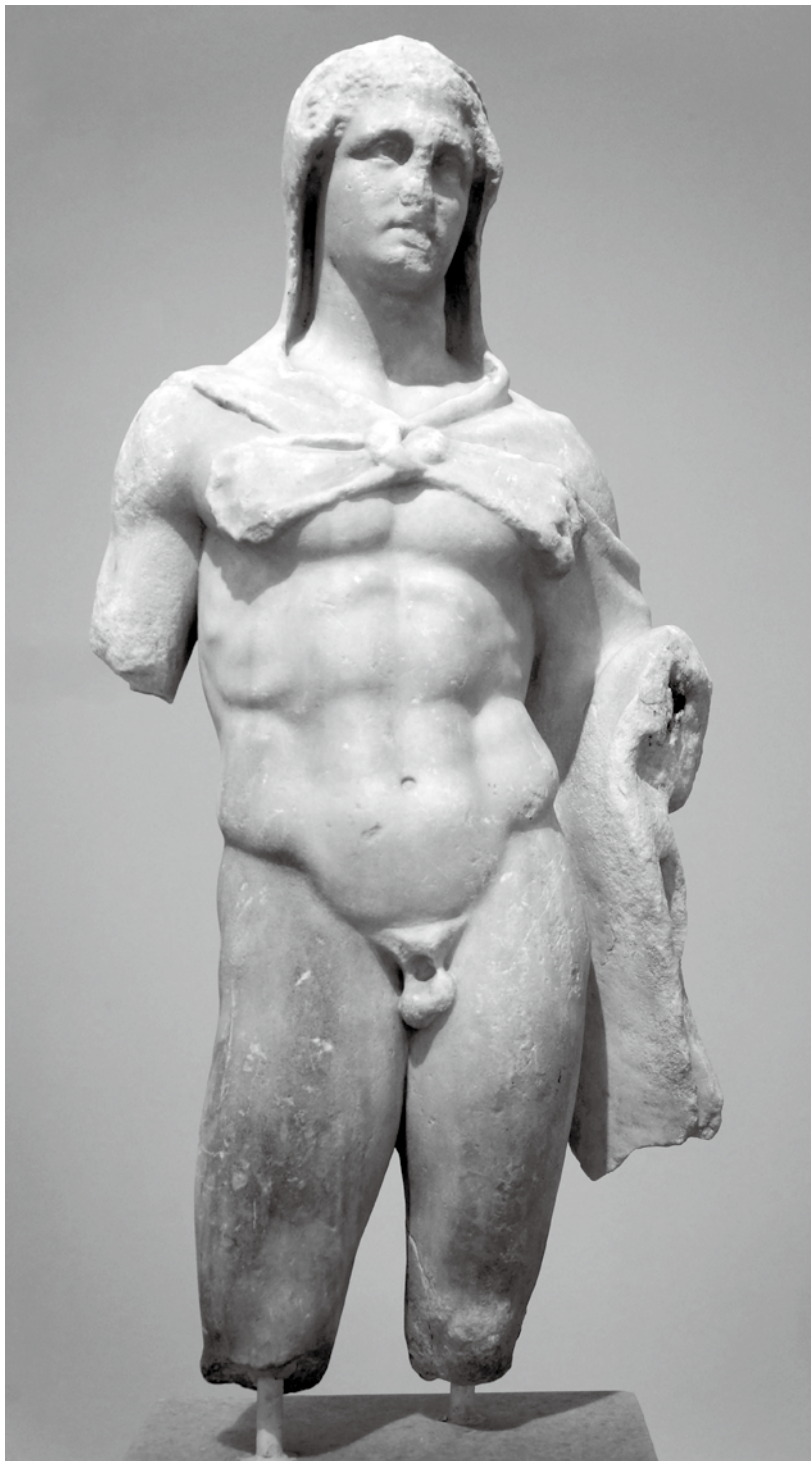
◀グロティウスにより復元されたアラトスの「膝を折る巨人（エンゴナシン）」。この人物が後に「ヘルクレス」に変わっていった。（Linda Hall Library Digital Collections より）

『ファイノメナ』の星座

アラトスのファイノメナに記される星座の中には、天体と星座が混同されているものがいくつかあります。

- プロキオン……現在はこいぬ座の1等星の固有名ですが、古代ギリシアではつねに星名でもあり星座名でもありました。古代ギリシア末期のプトレマイオスの著述では、こいぬ座の中の一星に分類されています。
- プレセペ……プレセペはかに座にある星団ですが、古代ギリシアではプレセペとかに座は頻繁に混同されています。古代ギリシア末期のプトレマイオスでは、かに座の中にある天体に分類されています。
- キュノスーラ（犬の尾）……この名前も、こぐま座を指すか、恒星のポラリス（現在の北極星）を指すかの混同して用いられているようです。古代ローマの詩人ミルトンは、恒星ポラリスをキュノスーラとし「アルカディアの星」とも呼んでいます。
- プレアデスとおうし座……プレアデス星団はおうし座とは独立した星座とみなされていましたが、プトレマイオスではプレアデスもおうし座に組み込まれています。





◀ 労苦に耐えて屈む者 ▶ はギリシア最大の英雄へ姿を変えた

ドーリア人の伝説上の英雄だったとされ、やがて時代と共にドーリア人の枠を超えて、各地の英雄が吸収されていき、全ギリシア的な英雄に昇格していったキャラクターです。有名な十二の功業も、各地の神話が統合された結果であり、ヘルクレスの活躍範囲が地中海西端から黒海東端にまでわたっているのも、このためであると考えられています。ヘルクレスは、ギリシア神話において古代ギリシアが発展するとともに成長していった比較的新しい英雄像なのです。

プトレマイオス以後

これまで紹介したように、発祥から姿を変えたり、姿は類似でも意味付けが大きく変わっていった星座は多く数えられます。まだ紹介していない星座もありますし、今後の研究により、さらに新たな解釈も生まれてくることでしょう。

古代メソポタミアから、多くの基本的な星座が古代ギリシアへ受け継がれ、ギリシア地域で伝承された神話が星座の神話として後付けされ、現代の私たちの知っている星座を彩っているのです。これらの星座の変遷は、紀元2世紀のプトレマイオスにより全天の星座の基礎として固められました。プトレマイオスの時代はすでに古代ギリシア時代の衰退期で、古代ローマ帝国がオリエントから全地中海地域を支配する時代へと移行しつつありました。古代ローマでは、皇帝が支配し、キリスト教以外の宗教が禁止されたことを背景として、自由な想像力が妨げられ、科学は著しく停滞してしまいました。一方で古代ギリシアの叡智はイスラム世界へ輸入され受け継がれます。プトレマイオスの天文学はイスラム世界の影響を受けて、ヨーロッパに逆輸入され、ルネサンス期に再び脚光を浴びることとなりました。

ルネサンス期には、科学や文化がこれまでの停滞を吹き飛ばすように発展し、天文学も大きく進化します。それでも、プトレマイオスの48星座の基本形は維持されたまま現代に至っています。

■参考文献

- 『BABYLONIAN STAR-LORE』(Gavin White, Solaria Publications)
- 『星座の神話』(原惠)
- 『わかってきた星座神話の起源—古代メソポタミアの星座』(近藤二郎)
- 『わかってきた星座神話の起源—古代エジプト・ナイルの星座』(近藤二郎)
- 『Star Names - Their Lore and Meaning』(Richard Hinckley Allen)
- 『The Trustees of the British Museum』(大英博物館)
- 『Treasures of Ancient Greece』(特別展 古代ギリシャ)
- 『国立西洋美術館名作選』(国立西洋美術館、新藤淳、中田明日佳編)
- 『グロティウス星座図帳』(Hug.Grotii Syntagma Arateorum)
- 『アルマゲスト』(プトレマイオス著、藪内清訳)
- 『ギリシア教訓叙事詩集』(伊藤照夫訳)

アテネ近郊で見つかったヘルクレスの大理石像。失われた右手には退治したカニを掲げていると推定される。ヘルクレスの像や絵画は、このように退治した獅子の毛皮を被った姿で描かれることが多い。

(アテネ国立考古博物館所蔵)